ミーティングリポート

今回はブライトボディ代表中田よりロンドンオリンピックでの活動報告を行いました。

―前回の主な内容―

＜ロンドンオリンピックでの活動報告＞

今回は、この夏に行われたロンドンオリンピックでの活動を報告します。現地でのリアルな出来事や雰囲気、活動報告を写真、ビデオ、資料で見ていただきました。参加者の皆さんからの質疑応答に答える形でもお伝えしました。

日本オリンピック委員会（ＪＯＣ）が今回のロンドンオリンピックに派遣した選手団２９３名（２４競技）、役員が２２０名派遣されています。メダル獲得３８個、入賞選手が１７９名と素晴らしい成績を残され感動しました。

ＪＯＣおよび各競技団体としてはオリンピックでメダルが獲得できる選手を派遣しようと国内・外での強化しておられる取り組みが分かります。

今回のロンドンオリンピックでは現地にマルチサポート・ハウスが文部科学省直轄事業でした。この「マルチサポート・ハウス」は東ロンドンの選手村から徒歩１０分圏内の場所にあり、事業費は約５億４，０００万円。普段はダンスホールなどに利用される３階建ての劇場を使用していました。スタッフ人数４０名、利用人数のべ４，２１７名でアジア大会での利用よりも２．７倍の利用となりました。普段の活動で選手をサポートしているスタッフにとってより現地での活動が可能になってくる施設です。このような取り組みをしている国は一般的ではなく、日本が特別な形でサポートしているのです。

陸上の長距離選手団は事前合宿としてロンドンのセントメアリー大学で行われました。この大学には日本の他に中国と南アフリカも練習会場にしていました。日本選手はこの大学の寮に泊まり、試合前まで調整を行いました。大学内には医科学サポートも受けられるように設備を整えました。

陸上女子５，０００ｍ、１０，０００ｍで金メダルをとったモハメド・ファラ選手がセントメアリー大学出身でした。

選手村には、食堂、トレーニングセンター、パソコンルームなどが設備されています。食堂ではバイキング形式で選手が自ら食事を選んで取っていきます。またマクドナルドもあります。そこでは選手の食事に対する意識の高さが必要になります。

世界で戦うには、選手自身が食事やトレーニングに意識を持ち勉強することも大切です。選手をサポートするスタッフは選手の自立を促すことが大切です。日本は世界的にみれば少し過保護な一面があるかもしれません。また今回は、スタジアム内には監督やコーチも入れませんでした。選手が一人で試合前に調整を行わないといけません。そういう部分でも、選手の自立が必要になります。

Q.「選手の食事について試合の日とそうでない日の食事は違いますか？」
A. 基本的に食事は自己管理です。必要な場合はサポートスタッフを付けている選手もいます。食事についてすごく待遇が良く、日本食から様々な食事が用意されおり、カロリーなど記載されていたので選手自身でしっかりコントロールできるようになっていました。

Q.「会場内のアクセスは？」
A. 今回のオリンピックはとてもコンパクトでありました。選手村も競技場へ徒歩で行ける距離でした。開会式では競技場への移動を含めて通常６時間ほど拘束され選手のコンディションを考えると参加を躊躇する団体も多いですが、今回は２時間程度の拘束ですみ、非常に良かったと思います。今後東京オリンピックが誘致され、このようなコンパクトな素晴らしい大会になるよう期待したいです。みなさんと共に東京オリンピックが開催されるようにスポーツを盛り上げていきましょう。

参加者：高校野球指導者２名、中学野球指導者１名、理学療法士７名、地域運動指導者３名　トレーナー1名、合計１４名

＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＞＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜＜

次回の開催予定

次回の開催予定は、下記の通りです。個人的に質問のある方は少し早めにいらして下さい。この機会に是非ご参加下さい。

平成２４年１１月５日　「スポーツ指導者の持つ疑問点」